様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　4　月　10　日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０３２００８９
研究課題名（和文）　新たな学習英文法構築のための基礎的研究
研究課題名（英文）Basic Research for Creating a New Framework of English Grammar for Learners
研究代表者
八木　克正（YAGI KATSUMASA）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90099630

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、学習英文法の内容を根本的に見直し、科学的根拠を与えることにあった。好ましくない有害な英語教育の内容を洗い出すこと、変化する英語を phraseology の立場から実態調査と分析を行い、あらたな事実を記述・説明すること、今の英語の実態を反映していない中学校や高等学校の学習内容、受験参考書や英和辞典の内容を、科学的な実態調査をもとに修正を求めるための研究活動を行い、いずれの点についても講演、論文、研究発表、著書の形で成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：
The main purpose of this research project was to give scientific foundation to the contents of English education in Japan. The contents of English education in this country contain many false and unnatural grammatical rules and expressions fabricated out of those false grammatical rules. Our research results were presented in various ways, and new findings were constantly presented at various conferences at home and abroad, thus ascertaining the legibility of our findings during the past four years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	3,300,000	990,000	4,290,000
２００９年度	2,100,000	630,000	2,730,000
２０１０年度	2,100,000	630,000	2,730,000
２０１１年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総　計	9,600,000	2,880,000	12,480,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：
(1) phraseology (2)英語教育内容の再検討　(3)英語参考書の問題点　(4) 英和辞典の問題点　(5) 学習文法の見直し

１．研究開始当初の背景

八木の研究の過程で、平成 18 年度のころに、雑誌『英語教育』のクエスチョン・ボックスの回答をする中で、中学・高等学校の英語教員採用試験問題に重大な問題があることがわかってきた。そこで、平成 17,18 年度

の問題の一部を調べると、一部の県の採用試験問題は問題として成り立っていないものがあることがわかった。具体的な問題点のいくつかは、『世界に通用しない英語―あなたの教室英語、大丈夫？』（2007）の中で明らかにした。

また、その後の調査の中で、大学入試問題の参考書、問題集にはひどく古い英語が使われていたり、著者のひとりよがりの解説があることがわかった。高等学校の教員などから事情を聴くと、準教科書などと言われる参考書などにも、同様な問題があることがわかった。そこで、上記の著書の中で、問題の実態を調べ、それを是正する基礎的な研究が必要であることを述べた。

大学受験関係の参考書などの英語は全体的に文語であり、堅苦しい。従って、大学に入って今の英語に接するととまどう学生が多い。特に生の話し言葉は知らないことばかりである。話し言葉に習熟するためには、文法よりも、定形表現、成句表現など、いろいろな名称で呼ばれるが、塊となった表現を学ばねばならない。英語に限らず一般に言語は、文法規則と語彙によって発話を形成するという手間を省いて、慣用的に使う要素を塊にして記憶し、それを頻用する傾向がある。母語話者はその塊が当たり前になってそれと気付かないほどであるが、それが外国語としての英語の学習を困難にしている。この観点をもつ研究が phraseology である。そのような観点をもって英語を見直すと、英語学習内容の改善点がおのずと明らかになってくる。

本研究の目的は、学習英文法の内容を根本的に見直し、科学的根拠を与えることにある。我が国の英語教育は、「英語が使える日本人の育成」を目標にすることが明らかにされ、そのための研究や実践が進んできた。その問題意識の中心は、教授法や教材作成法などにある。しかしながら、もっとも根本的な、「教育内容」、すなわち何を教えるか、については語られることは少ない。教育内容に科学的根拠を与えるためには、第一に、英和辞典を始めとして、大学受験参考書、いわゆる準教科書、さらには一部の県の英語教員採用試験問題などに含まれる好ましくない有害な内容を洗い出すことが必要である。

第二に、コミュニケーション重視の英語教育と言いながら、特に高等学校の学習内容・受験参考書の基本は、古い文語体の英語であり、いまの英語の実態を反映していない面がある。教育内容を現代英語の実態に合うようにするためには、科学的な実態調査と分析が必要である。

研究代表者・八木は、基盤研究(C)（一般）平成 17 年度～平成 19 年度「英語が使える日本人育成のための英語学習文法の体系構築と個別的記述の見直し」の研究において、主に英和辞典の諸問題の研究に集中した。最終年度の 19 年にようやく学習文法全体に関わる問題を取り上げ始めたが、学習英文法の構築にまではいたらなかった。その理由は、あまりにも問題が広範囲に存在し、さまざまな問題の指摘に終わったところにある。そこで、改めて、若い人たちの協力を得ながら全面的な問題の洗い出しから始める必要が生じた。八木は、今日までに日本の英語教育の内容には、数多くの問題があることを、さまざまな講演や学会のシンポジウム、さらには著作や論文で明らかにしてきた。古い英語、あり得ない英語表現などが、教室はもとより、受験参考書、準教科書、果ては英語教員採用試験にまで深く根付いている。古い、誤った知識を排除すると同時に、今の英語の実態を明らかにし、科学的根拠をもった教育内容にしなければならない。

そのために、第一に、今日までに作りあげられ、受け継がれてきた学習文法を総点検し、不必要なもの、有害なものを洗い出して排除するための研究を進めなければならない。
第二に、話し言葉を中心とした今の英語の実態調査を行い、その成果を利用して学習文法に盛り込む内容を決定していかねばならない。そのためには、phraseology（成句研究）の研究を推進することが必要である。phraseology とは、細かい文法規則よりは、無数に存在する成句の習得が、母語の習得にも外国語の学習にも重要な役割を果たすという考え方に基づく研究方法である。新たな英語学習内容の体系を作り上げるためには、この視点が不可欠である。

２．研究の目的

(1)　学習文法を形成する多様な教材の中身を点検し、問題点を洗い出すこと。

学習文法を構成する要素のひとつは、明治から大正にかけての、イギリスの規範文法を基礎として作り上げられた文法（代表的なものは、斎藤秀三郎の *Practical English Grammar* (1898-1899)）、それをもとにしたいわゆる『山貞』などの受験参考書、教科書、あるいは大正時代以降 OED, COD をもとにして作られた英和辞典（代表的なものは、斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』）とその内容のかなりの部分を受け継ぐ今の英和辞典がある（八木克正『英和辞典の研究―英語認識の改善のために』（開拓社,2006）/『世界に通用しない英語』（開拓社, 2007）参照）。英和辞典の保守性は根深いものがあり，英和辞典の保守性は、学習文法に重大な影響を与えている。そして、英語教育界の保守性に根拠を与えている。それがまた、様々な教材の保守性の根拠にもなっている。日本の英語教育の問題点はこのような相互に支え合う保守

性にある。八木は上記『世界に通用しない英語』の中で、受験参考書、準教科書やその他の教材の総点検を提案した。４年の研究期間をかけて検証し、成果を時々にまとめながら、数多くの論文、学会発表、講演、著書の形で公開する。

(2)　phraseology の研究を進め、現代英語の実態を明らかにすること。

今出されている文法書や英和辞典は必ずしも現代英語の実態を十分に明らかにしていない。その原因のひとつに、phraseology の観点が欠如していることがある。日本では、八木・井上は独自の言語データベース（コーパス）を構築し、phraseology の観点からそれを利用してさまざまな英語の実態を明らかにしてきた。phraseology の観点からのまとまった研究成果は、今のところ井上の博士論文に修正を加えた著書 *Present-Day Spoken English: A Phraseological Approach.*（開拓社, 2007）だけである。この観点をもって現代英語の実態調査を明らかにする。

(3)　(1)(2)の成果をもとにした新たな学習英文法書の枠組みを公開すること。

研究期間内に学習英文法の骨子を完成し、論文・単著書だけでなく、啓蒙的な単行書やホームページ等を通じて英語教育者に開示し、意見を求めるところまでは進める。

英和辞典や学習参考書や教員採用試験などにみられる問題点を洗い出す作業は八木独自のものである。ここを出発点として、問題のルーツをさぐる辞書学的研究、なぜ問題であるのかを明らかにする言語学的研究へと発展する手法も八木独自の研究法である。

phraseology 研究は、ヨーロッパでは盛んであるが、日本では八木と井上以外に研究者はほとんどいない。今後も独自の研究成果を国内で発表してゆくと同時に、海外の学会にも報告して国際的な研究進展に貢献したい。古いものを廃し、新しいものを採り入れる研究を通じて英語の教育内容に科学的根拠を与えるという視点をもった研究は独自のものである。

３．研究の方法

平成 20 年度は下記(1)が中心であった。特に分担者・井上は、研究をするための環境が十分に整っていない面があるので、その条件整備を初年度の重点目標とした。平成 21 年度、平成 22 年度は下記(2)、平成 23 年度は研究期間の最終年として下記(3)が中心となった。研究期間を通じて研究会を開催した。また、研究成果は国内外の学会での口頭発表、あるいは論文・著書はその都度刊行した。

(1) 基盤整備と分析対象資料、データ収集

①　学習文法（教員採用試験・大学入試問題なども含む）の総点検のための文献収集と分析。

②　現代英語の実態調査と分析のための機器、書籍などの整備。

③　院生などの協力によるデータの収集・整理。

(2) 分析と研究、研究成果発表

①　英語ネイティブスピーカーをインフォーマントとする調査。

②　研究代表者と分担者、またデータ整理などの協力者による研究会の開催。

③　研究成果をまとめて、内外の学会で研究発表。

④　研究成果をまとめて、内外の学会誌への投稿、著書の執筆。

(3) 学習文法体系構築

研究成果をもとに、最終目標である学習英文法の新たな体系の構築。

４．研究成果

平成 20 年度

研究初年度である平成 20 年度の目標を「基盤整備，分析対象資料とデータ収集、研究グループの意思統一」と位置づけて、その達成に努力してきた。その結果、ほぼ目標を達成した。

我々は phraseology の研究を重ね、８月に Helsinki 大学で開催された Europhras 2008（ヨーロッパ phraseology 学会 2008 年度大会）でそれぞれ別の研究発表を行い、それぞれに一定の評価を得ることができた。

日本的な英語研究は phraseology の重要性を念頭においた研究の歴史である。その研究はイギリスの言語学にも影響を与えている。一方で多くの問題のある認識をそのまま受け継いできたという問題があることも明らかにした。その問題点の多くは、英文法書や学習参考書の中で受け継がれている。この面での学会報告や論文執筆を行ってきた。

平成 21 年度

前年度に引き続き、英語教育内容に科学的根拠を与えるために、第一に、英和辞典を始めとして、大学受験参考書、いわゆる準教科書、さらには一部の県の英語教員採用試験問題などに含まれる好ましくない有害な内容を洗い出す研究を進めた。

第二に、教育内容を現代英語の実態に合うようにするためには、科学的な実態調査と分析を進めた。

このような問題意識を前提に、日本の英語教育の内容を根本的に見直すための研究を phraseology の観点から推進してきた。2009 年７月に phraseology についての国際会議を主催、2010 年２月に言語研究の実証性をテーマにした４名の講師とコメンテーター１名による講演会を主催するなど、国内外の共同による研究推進をおこなった。また、研究成

果を報告する講演に招待され、議論を深めることができた。八木は、北京第二外国語学院にも招待を受け、２つの講演をおこなった。

平成 22 年度

八木の「同等比較は最上級の意味を持つか？（上）（下）」が、100 年以上続いてきた英語教育の重要な文法事項「同等比較 as … as any/ as … as ever が最上級の意味をもつ」とする内容が根拠をもたない、無用な「文法」であることを指摘した。このような問題点は、単にこの事実にとどまらない、文法全体の批判的検討を迫る問題提起である。この他、「英語教員のためのリフレッシュ講座」の招待講演で私立の高等学校の入試問題の数多くの問題点を指摘し、中高の先生方と問題点を共有した。

現代英語の分析と新しい定型表現の傾向を、内外の学会の大会や、研究論文で論じた。井上の「新しいフレーズの実態－until to の場合」がその論文の１つである。

日本で初めての「phraseology 研究会」を立ち上げ、２回の研究会を主宰し、数多くの発表をしてもらった。また、2009 年度に開催した国際的な研究会で発表された論文をまとめた論文集を１冊の本の形にして出版した。学習文法の枠組みを構築する方向は、これからの課題となる。

平成 23 年度

基本的な問題意識と研究の推進方法に変化はないが、根本的な点で「学習文法の見直し」というよりは、「英語学習内容全体の見直し」の方向に移行してきた。それほど根本的に内容を見直す必要があることがわかってきたのは、phraseology の研究によるものである。また、phraseology の研究とヨーロッパの言語に関する「参照枠」（Common European Framework of Reference）との深い関わりがわかってきたからである。この観点から日本英語コミュニケーション学会で八木が司会兼講師、井上が講師として、シンポジウムを行った。

とりわけ、八木の２冊の著書『英語の疑問新解決法』（三省堂）、『英語教育に役立つ　英語の基礎知識Ｑ＆Ａ』（開拓社）は、これまで研究してきたことの集大成である。また、井上は phraseology の立場から新たな英語の実態を明らかにする研究に取り組み、国際現代英語学会（ドイツ）、アジア辞書学会などの国際学会で成果発表した。また、日本英語コミュニケーション学会の学会誌に掲載された it looks that …の構造を論じた論文に学会賞（奨励賞）が授与された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

1. Ai Inoue, “Functional differentiation between hesitation fillers: The case of *you know what* and *let’s say*” 査読有. *Phraseology and Discourse: Cross-Linguistic Corpus-Based Approach*. 2012, 1-8.井上亜依「it looks that 節を対象とした補文構造の画一化－言語経済の観点から」*JASEC BULLETIN*　（日本英語コミュニケーション学会）査読有 No. 20, Vol.1., 2011, 49-63.
2. Ai Inoue, “A phraseological approach to enriching the quality of how phrases observed in contemporary English can be better incorporated in learner’s dictionaries” 査読有. *Lexicography: Theoretical and Practical Perspective: Papers submitted to the Seventh ASIALEX Biannual International Conference* (ASIALEX Proceedings). 2011,　608-617.
3. 八木克正「同等比較で最上級の意味を表すことができるかーas … as any (…) as … as ever の本質－」査読有.『英語学・英語教育研究』（日本英語教育学会創立 30 周年記念号）2011, 170-187.
4. 井上亜依「成句表現成立に働く言語経済の冗漫の原理」査読有.*JASEC BULLETIN*（日本英語コミュニケーション学会）No. 18, Vol.1. 2009. 27-39.
5. Ai Inoue, “A Problem of Phonetic Notation - Stress Patterns of Set Phrases Including “day”” 査読有. *English Phonetics* (The English Phonetics Society of Japan.) No.13. 2009, 125-134.
6. 八木克正・井上亜依「英語教育のための phraseology（下）」査読有.『英語教育』６月号.（共著）57: 3 , 2008, 65-67.

7. 八木克正・井上亜依「英語教育のための phraseology（上）」査読有.『英語教育』５月号.（共著）57: 2, 2008, 65-67.

〔学会発表〕（計 45 件）

1. Ai Inoue "Newly observed phraseological units functioning as complex prepositions in contemporary English: in the case of *be on against* and *in and of itself*" 第５回フレイジオロジー研究会（関西学院大学梅田キャンパス）2012. 3. 15.
2. 井上亜依 「新しいフレーズの相関接続詞化－though A but B を対象として」日本英語コミュニケーション学会第２０回大会（関西学院大学）2011.10. 8.
3. 井上亜依 「phraseology に基づく大学生用テキストとそれを利用した教育実践」第 4 回フレイジオロジー研究会（関西学院大学梅田キャンパス）2011.9. 25.
4. Ai Inoue "A phraseological approach to enriching the quality of how phrases observed in contemporary English can be better incorporated in learner's dictionaries" Symposium "Phraseology, a New Approach to Language Studies." ASIALEX2011, Aug. 22-24 (The Asian Association for Lexicography) (Kyoto, Kyoto Terrsa,) 2011.8. 22.
5. Ai Inoue "A phraseological approach to finding the functions of newly observed compound prepositional phrases *until to* and *up until to* in contemporary English" ASIALEX2011, Aug. 22-24 (The Asian Association for Lexicography), (Kyoto, Kyoto Terrsa) 2011.8. 22.
6. Ai Inoue "The working of the principles of linguistic economy for the formation of new phrases observed in contemporary English: in the case of *until to* and *it looks that*" 4th International Conference on the Linguistic of Contemporary English (University of Osnabruck, Germany) 2011.7. 20.
7. Ai Inoue "A branch of phraseology: A linguistic approach to the analysis of up-to-date phraseological units observed in present-day English" 第 4 回フレイジオロジー研究会シンポジウム（関西学院大学梅田キャンパス）2011.3. 6.
8. Katsumasa Yagi, " Old and New Phraseological Units: Currency Assessment and Mechanism of New Formation," The Third Conference of Japan Society for Phraseology (Umeda Campus, Kwansei Gakuin University) 2011. 9. 20.
9. 八木克正「Phraseology と Idiomology-現代ヨーロッパの言語研究の傾向と齋藤秀三郎の相似性 日本英学史学会第４７回全国大会 （京都大学・吉田キャンパス） 2010. 10. 23.
10. Ai Inoue "The functional differentiation between hesitation fillers – In the case of *you know what* and *let's say*" European Society of Phraseology. (Spain, University of Granada.) 2010.6. 29.
11. Ai Inoue "Analyzing the stress rules of phraseological units by investigating various types of phraseological units" 日本英語音声学会第 15 回年次大会（関西学院大学）2010.6. 26.
12. Ai Inoue "The various functions of *here we go* and *here we go again* – A phraseological approach to understanding how spoken phrases can be better incorporated into dictionaries" English Dictionaries in Global and Historical Context, (Canada, Queen's University) 2010.6. 5.

13. Ai Inoue, “Semantic identification of phrase variants in the case of *and yet* and *but yet* based on a phraseological approach” ASIALEX2009 (The Asian Association for Lexicography) (Thai, Imperial Queen’s Park Hotel) 2009.8. 20.
14. Ai Inoue, “The principle of least effort working in present-day English – From *pirated version* to *pirate version*, and related phenomena” The Third International Conference on the Linguistic of Contemporary English (U.K. University of London) 2009.7. 15.
15. Ai Inoue, “Phraseological studies on present-day spoken English” Symposium Phraseology 2009 in Japan（関西学院大学）2009.7. 11.
16. Ai Inoue, “Phraseology – The Current Trend in the World and in Japan” （依頼講演）Phraseology 2009 in Japan（関西学院大学）2009.7. 8.
17. Ai Inoue, “The stress patterns of set phrases including “day”” The 10th Joint Seminar on English Phonetics by EPSJ & PSK in Seoul (Republic of Korea, Seoul National University) 2009.3. 23.
18. 井上亜依 「成句表現の機能と相違－and yet, but yet, yet の場合」日本英語コミュニケーション学会第 17 会年次大会 （大阪商業大学）2008.10. 11.
19. Katsumasa Yagi, "English phraseology in Japan" Europhras conference 2008 (Finland, University of Helsinki) 2008. 8. 15.
20. Ai Inoue, “*You know what*? – a set phrase in spoken English corpus” European Society of Phraseology. (Finland, University of Helsinki) 2008.8. 15.

〔図書〕（計 10 件）

1. 八木克正『英語教育に役立つ英語の基礎知識 Q & A』（単著）開拓社, 2011. pp. 179.
2. 八木克正『ひつじ意味論講座５ 主観性と主体性』（澤田治美（編））（本人分担「英語形容詞の主観性」(149-164)）ひつじ書房, 2011. pp. 251.
3. 八木克正『英語の疑問 新解決法 伝統文法と言語理論を統合して』（単著）三省堂, 2011. pp. 213.
4. F. Čermak, Katsumasa Yagi, Ai Inoue, 他. *Phraseology, Corpus Linguistics, and Lexicography*, Katsumasa Yagi, Takaaki Kanzaki, and Ai Inoue (eds.) (2011) Kwansei Gakuin University Press. pp. 234.
5. 井上亜依、八木克正他『英語音声学』11・12 合併号（共著）（本人分担「英語音声表記の問題点－英和辞典における前置詞・不変化詞を伴う成句のストレスについて－」日本英語音声学会, 2008, 55-70.

６．研究組織

(1)研究代表者
八木 克正（YAGI KATSUMASA）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90099630

(2)研究分担者
井上 亜依(INOUE AI)
防衛大学校・総合教育学群・外国語教育室・准教授
研究者番号：70441889

(3)研究協力者
磯辺 ゆかり（ISOBE YUKARI）
関西学院大学・言語コミュニケーション文化研究科・大学院研究員
研究者番号：なし